

## イメージ文化論

神社仏閣を参拝するとき、あるいはただ通り抜けるだけのときでも、鳥居や門をくぐるにあたってくると身をひるがえし、一礼をしてから再び歩き出す光景をよく見かけるようになりました。敬虔な気持ちの発露を見ることは快いものですし、まして子どもがペコリとしているところなど、純粋な素直さに尊さをおぼえたりもしますが、同時に、その人のすぐ後ろをまさに歩いている自分としては、「くるか？」と予想していたとしても）急な旋回に驚かされると同時に、まるで自分がそこにいないかのような気分させられ、あるいはその人と神仏との間をふさぐ者としてにわかに存在設定されてしまったような気さえして、身の置き場のない気持ちにさせられることもあります。傍若無人という言葉が浮かんだりもします。ともかく、①このような傾向が比較的短い期間の中でブーム的に広がったこと（もちろん昔からそうしている人はいましたが、そのこととそれが広く行われることは別のことです）、②神社仏閣という歴史性と結びつきやすいものにおいて行われていること、またこの②とも関連して、③それを行う人においては「これは正しいこと」「正当な／正統なこと」と認識されやすいだろうこと＝反省されることが少ないこと、などがここでの現象について指摘することができ、伝統というものが立ち上がるまさにその瞬間に立ち会っているような気にもなってきます。この経験は、あらためて伝統なるものについて考えるきっかけにもなるでしょう。

ひとたび規範が立ち上がってしまうとそれに反省の目をむけることは意外と難しく、それは暗黙的な強制かのように働き、その線にそって物事が流れていってしまう、ということは歴史において何度も経験されてきたものにほかなりません。学問は、行動の前後に反省することで、結論を先延ばしにする営為とも言えます。そして反省が先立つことでその先に出来していく行為にもおのずと変化が生じるはず。まどろっこしいですし、（少なくともわかりやすいかたちでの）生産性もないかもしれないですが、そのような営為に耐えることは人間の歴史／文化において絶対に欠かすことのできないものであるはず。「正しさ」に流されずに立ち止まろうとすること。そのためにはひっかかりが必要です。講義ではさまざまな文献や視点の紹介、歴史的な事例をひとつでも多く提示すること、講義者自身の立ち止まりの経験を見ていただくことで、ひっかかるための枝葉を伸ばすきっかけの提供となることを念願しています。

佐藤洋輔（放送大学非常勤講師）